

司馬遼太郎「司馬遼太郎が考えたこと 1」

生きている出雲

カタリベというものがある。いまも生きていると知ったとき、私のおどろきは、生物学者がアフリカ海岸で化石魚を発見したときのそれに似ていた。

カタリベとは、魚類でも植物でもない。ヒトである。上古、文字のなかったころ、諸国の豪族に奉仕して、氏族の旧辞伝説を物語ったあの記憶技師のことだ。語部という。当時無数にいたであろうかれら古代的な技術者のなかで、『古事記』を口述した稗田阿礼の名だけがこんにちに残っている。漢字の輸入がかれらの職業を没落させた。

しかし、儀式用にはながくその存在はのこってはいたらしい。西紀九二〇年ごろに成立した『延喜式えんぎしき』の踐祚大嘗祭せんそだいじょうさいの条くだりに「伴宿禰とものすくね、佐伯宿禰さへきのすくね、おのおの語部十五人をひきゐ、東西の掖門えきもんより入りて、位に就き、古詞を奏す」とある。すでに実用性は失なっていた。しかしアイヌの社会でユーカラを語る老人のように、儀礼的価値として、平安初期にはまだ生きのこっていたことになる。

が、平安時代どころではない。延喜年間よりもさらに千年を経たこんにちになお語部はいたというおどろきから、この話は出発する。

……やがて、W氏は重い口をひらいた。W家は国造家である千家の主宰する出雲大社の社家であることは、さきにのべた。古い社家は大い神別の家であり、家系は神代からつづいてきた。したがって、古代出雲民族の風習のいくらかを家風にもち、その一例として語部の制も遺してきた。語部は、W家の場合、一族のうちから、記憶力がつよく、家系に興味をもつ者がすでに幼少のころにえられ、当代の語部から長い歳月をかけ、一家の旧辞伝承をこまかく語り伝えられるというのである。ある部分は他に洩らしてよく、ある部分は洩らしてはいけない。当代の語部はむろんW氏そのひとであり、W氏はすでにその子息のうちの一を選んで、語りを伝えはじめているという。そのうち、『古事記』にも『出雲風土記』にも出ていない重要な事項があるというのだが、それについてはW氏はなにもいえない、といった。それでは、と私は話題をかえ、出雲で会った多くの人々にしたような質問をW氏にもした。「あなたのご先祖は、なんとという名のミコトですか」

「私の、ですか」とW氏はすこし微笑み、ながい時間、私を見つめていたが、やがて、「大国主命です」といった。

出雲の様子をすこし知りはじめた私は、これにはひどく驚かざるをえなかった。ここで大国主命の名が出るのは白昼に亡霊を見るような観があった。大国主命およびその血族はすでに神代の時代に出雲から一掃されて絶えているはずではないか。「そのとおりです」とW氏はいった。「しかし、ある事情により、ただ一系統だけのこった。私の先祖の神がそうです」。その事情は、語部の伝承のうちでも秘密の項に属するために言えない、という。言えなければきかなくてもよい。とにかく、W氏によれば、神代以来、出雲大社に奉斎する社家のうちで、大国主命系、つまり出雲の国々神系の社家は、W家一軒ということになるのである。

……私はようやく知った。W氏は、第一次出雲王朝の残党だった。心理的に残党意識をもっているだけでなく、げんに、第一次出雲王朝を語り伝えるカタリベでもあった……。

(昭和 36 年 3 月)